

明恵の『菩提心論』理解

——『納涼坊談義記』を中心に——

前 川 健 一

一 『納涼坊談義記』の成立と作者

『納涼坊談義記』は、明恵による『菩提心論（金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論）』（不空訳）の講義を隆詮が記録したものである。⁽¹⁾

この講義は神護寺納涼坊の伝法会で、嘉禄元年（一二二五）九月四日から七日間にわたって行われたもので、明恵は四日から七日まで学頭として講義を行っている。残りの三日間は「各談之」（十四才）のことであるが、十余人集まった学衆のうち、冒頭に名前を列記している「禎遍」「聖範」「隆詮」「□□（虫損）」「玄暁」「隆弁」の六人が講義をしたのではないかと思われる（ただし、聖範については「不参」（二才）と注記されている）。

嘉禄三年（一二三二）五月の「神護寺制規」（鎌倉遺文三六一四）には「大法師隆詮」「大法師聖範（梅尾北坊明願房）」「権律師隆弁」の三人が名を連ねている。このうち、隆弁は明恵からの密教の伝授を記した『真聞集』（明資三所収）の筆者であり、生年は正治二年（一一〇〇）または建久九年（一一九八）と推定され、延応元年（一二三九）には僧都であったことが知られる。⁽²⁾

聖範は、後述するように延応元年（一二三九）に五十七歳であったことが知られるので、養和二年（一一八二）に生まれたことになる。「神護寺制規」に「梅尾北坊明願房」とあるが、『高山寺縁起』の「北坊代々」の項に初代として「明願上人」（明資一・六六五）とあるのに対応する。管見では、以下のような事跡が知られる。⁽³⁾

建暦元年(一二一〇)七月廿一日「大方広仏華嚴經(八十華嚴)」卷一・卷二書写(高山寺聖教類第四部一六・一)

文暦二年(嘉禎元年。一二三五)正月廿九日 大明神講で問者(「喜海問答」)奥書、高山寺聖教類第四部一三三・二五。「喜海四十八歳時之記」奥書、高山寺聖教類第四部一六九・三八)

延応元年(一二三九)五月十七日「建暦三年請雨法日記」(高山寺聖教類第二部二〇九)を書写。「聖範生年五旬七」

玄暁については、高山寺聖教の中に玄暁所持本と考えられるものが数点あるが、平安時代に同名の人物がいたらしく、今問題にしている玄暁であるかは確定できない。『血脈類集記』第九には、真恵から法を受けた玄暁が記されているが、これに当たるか。「玄暁阿闍梨(四十二。播磨) 貞永元年十二月十五日庚寅(星宿水曜)於同院(≡金剛幢院)受之」(真全本一九七上)。

禎遍については、管見の限り、関連する記事を見出せない。

隆詮は、既に述べたように『納涼坊談義記』の筆記者である。先に挙げた「神護寺制規」の他、寛元二年(一二四四)正月十九日(明恵の十三回忌)に諷誦文(高山寺古文書第一部五八)を捧げている「権律師隆詮」は同一人物であろう。建長四年(一二五二)四月十七日に神護寺地蔵院で『六大無碍義抄』を書写した「金剛資隆詮」(頼瑣写本奥書)⁽⁴⁾も同一人物かと思われる。

高山寺関係資料以外では、文暦二年(一二三五)九月十一日、「高雄梅尾山寺(一本「梅尾」ナシ)」で行澄が行遍から伝法灌頂を受けた時、色衆として護摩の役を務め、翌十二日に「同寺」での良耀の伝法灌頂で、今度は誦經の役を務めた「隆詮」は、今問題にしている隆詮と同一人物と思われる(『血脈類集記』第十。真全本二〇七下)。また、色衆を務めている顔触れが共通しているので、以下各人の伝法灌頂(いづれも行遍の付法)に登場する「隆詮」も同一人物であろう(真全本二〇六下～二〇九上)。

明恵の『菩提心論』理解（前川）

天福二年（一二三四）三月十三日 範恵（於菩提院） 神供

文暦二年（一二三五）三月二十六日 印禪（於菩提院） 神供（なお、この時、「大法師」聖範」が散花の役を務めている）

嘉禎四年（一二三八）正月二十四日 聖宴（於菩提院） 神供（肩書は大法師）

寛元四年（一二四六）三月三日 了遍（於菩提院） 誦經（肩書は権律師）

建長二年（一二五〇）二月九日 真徹（於菩提院）

この隆詮は、貞永元年（一二三二）四月二日、東寺で灌頂を受けた隆詮（『東寺長者補任』^⑤）と同一人物であろう。というのは、上述の隆詮は寛耀・行清といった人たちと一緒に色衆を務めていることが多いのであるが、寛耀は安貞元年（一二二七）十二月十日に、行清は寛喜二年（一二三〇）に、東寺で灌頂を受けているからである。

なお、寛元三年（一二四五）二月十三日に皆明寺で実性が伝法灌頂を受けた際、「権少僧都隆詮」が護摩を務めているが、『血脈類集記』の記述に従う限り、寛元四年に権律師であった上述の隆詮とは別人と考えざるを得ない。

頼瑜の『真俗雜記問答鈔』には「隆詮僧都御房」が登場し、これが『納涼坊談義記』^⑥の筆者である隆詮と同一人物とされる。^⑦恐らくそうであろうと思われるが、同時代に複数の隆詮がいるようなので、もう少し検討が必要ではないかとも思われる。

現存する写本（慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵）には、表紙に「猷然」の名が記してあり、猷然所持本であったことを示している。猷然の名は、道範『貞応抄』巻上の写本に以下のように見える（乾元二年は西暦一二三〇三年）。

「乾元二年（癸卯）二月二十九日於神護寺月静坊為興隆拭老眼書写之畢

法印権大僧都猷然（七十）」（大正七七・七〇四上二三～一五）

これに続いて、三月三日には巻中を（同上七一〇下七）、三月六日には巻下を（同上七一四中二四）書写している。この写本に

「浄土院僧正賢賀」が加えた識語では、猷然を「八坂吉祥園院」(同上七一四中二九)の僧としている。また、徳治二年(二三〇七)四月十二日には、神護寺成身院で『不空表制集』巻二を(大正五二・八三八下二四〇二六)、同年五月三日には巻六を(同上八六〇下十二一三三)書写していることが知られる。年齢を「七十四」と記しているので、先の「猷然」と同一人物であることが分かる。

『納涼坊談義記』には「神護寺成□□□蔵本」(一ウ)とあり、猷然が神護寺で書写活動を行っている折、成身院経蔵で見出したものと考えられる。

二 『納涼坊談義記』の内容

『納涼坊談義記』には、合点がついているものを数えると三十一項目にわたって、明恵の発言が記録されている。それぞれの項目を列記すると以下のようになる(番号を括弧に入れたものは、合点が付せられていないが、独立した話柄と考えられるもの)。

(九月四日)

1 金剛頂瑜伽中等可有六種釈

2 大阿闍梨

3 上根上智

(1) 無惑(これは、次下6の中の「无惑」の解釈と同文。単なる誤写か)

4 不樂外道二乘法

5 大度量

6 勇鋭无惑

明恵の『菩提心論』理解（前川）

- 7 魔宮振動
- 8 常在人天受勝快樂事
- (2) 唯真言教中即身成仏
- (3) 凡真言教八十地ヲ好テ立テ不論地前
- 9 一切智・自然智・無碍智
- (九月五日)
- 10 外道二乘法
- (4) 秘密主遍一切処加持力故巡歴諸趣常在仏会云々
- 11 常在人天受勝快樂事
- 12 於諸教中闕而不書
- ※この四項目は前日と重複している。後述。
- (5) 変易生死
- 13 入無余二乗・廻心声聞
- (6) 変易生死凡夫受之二乗受之
- 14 無余衆生界・一切衆生
- 15 従凡入仏位者亦超十地菩薩境界
- 16 前以相説今以旨陳等
- 17 但具此心者能転法輪自他俱利
- 18 無我法中有真我
- 19 本有薩埵

- 20 観日月輪
- 21 悉含普賢之心
- 22 三摩地菩提心
- 23 五方仏位各表五智等
- 24 十六大菩薩
- 25 於心質中有一分淨性
- 26 金剛拳位衆行円満不立大日事
- (7) 証無生智
- 27 阿字本不生
- 28 一是通達心等
- 29 此觀若成等者
- 30 又散善門中等
- 31 密嚴国土

※この項目は「顯教密嚴国土ト云ハ八九十地菩薩所居土也。今大日土密嚴国土ト云、与彼同也異如何」という問いかけで終わっており、答えは記されていない。

1は題名である「金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論」の解釈であり、31の「密嚴国土」は『菩提心論』全体の末尾近くの句であるので、明恵の講義は『菩提心論』全体を扱っていることが分かる。隆詮は「上人御房御語少々注置之」(十四才)と記しているので、明恵が語った中から隆詮が重要と感じたものを記したと考えられる。

上に注意したように、10・11・12の話題が4・8・(1)と重複しているが、重複している箇所をそれぞれ比較してみ

ると、以下のようになる。

(不樂外道二乘法)

4 不樂外道二乘法者 種々異説アリ。上タル教ニテ見下テ余教ヲ外道ト云ハム事、更無^二難^一。雖然、数論勝論等ヲ云ハ可宜^レ欤。又、二乗ト云ニ、大小二乗ト云事アリ。雖然、担任タル義ニテ^(声)聞縁覚ヲ二乗ト云ム事、可然^レ欤。花嚴宗、超二乘地⁽⁸⁾云事ヲ尺スルニ、二乗ノ言ノ中ニ置大乘、超三乘地云事アリ。此ノ言ニ准テ云ハ、大小二乗ト云⁽⁹⁾、依憑トナルヘシ。雖然、此ハ一家ノ尺也。(二ウ^一三オ)

10 外道二乘法者 「外道ト云言ニ、顯教諸乘、皆可攝」云事、甚非也。凡外道者、背如来法印名也。即、数論六句義立、勝論廿五諦ヲ立、有大有性、諸法ヲ令有。「因縁有テ、諸法ヲ令有」トハ不云。此等、背如来法印故、外道ト云ヘシ。『楞伽經』中、有^(部)廿種外道。即小乘^(部)也。此ハ義説シテ、小乘ヲ外道ト云。人空法有ト云カ故、人法二空ヲ立ル法印ニ背カ故、外道ト云ヘシ。同二空ヲ説ヨリハ、更不可有外道之義也。若挙一不可、一外道ノ名ヲ得ハ、金剛界ノ大日ニ対テ胎藏ノ大日ヲ外道ト云欤。胎藏大日ハ、不具智故也。

米斎、又名鳩鵲外道。是数論也。惜暇故、不乞食。夜出、人家飲食落散拾テ食ス。国人、貴之故、衢設食。夜出食之。夜出似鳩鵲鳥。因為名也。(三ウ^一四ウ)

(常在人天受勝快樂)

8 常在人天受勝快樂事、如何。「瑜伽中、諸菩薩成テ、不至大日位、サテ有ナム」ト思者有欤。(三オ)

(3) 「秘密主、遍一切処、加持力故、巡歴諸趣、常在仏会」⁽⁹⁾云々。此モ「常在人天」等ト同事也。常在人天ト見ハ、

凡夫所見也。仏見前二ハ、更不死。即、行者觀智ノ前也。異熟依身ハ爛壞ス。此ハ人所見也(四ウ)

11 常在人天受勝快樂事、即身成仏スル人、在人天、受快樂也。即身成仏ト云ハ、一座觀智徹仏境時、自身同大覺位。不限自身、所依国土、皆成密嚴国土。余人不見之。出觀時、本人也。入觀時、即身成仏ト云也。此人、在人天、受快樂也。不限此、在々所々トモ云ヒ、又生々世々トモ云フ、常事也。『大日經』「密印品」ニモ、「世々生々」トモ云フ。皆觀智純熟人報也(大悉地ヲ得テ、周遍法界ニテ、自他見位ニモアルヘシ)(四ウ―五オ)

(唯真言法中即身成仏)

(1) 唯真言教中即身成仏、顯教中不説之歟。凡顯教小乘等マテモ、成仏スル定ハ、皆即身成仏也。即身成仏ハ、從何位論之乎。遇此教人、不論前生結縁、即身成仏スル歟(三オ)

12 「於諸教中闕而不書」ト云ハ、三密具足成仏ハ諸教闕セリ。「翫一心利刀顯教、振參密金剛密藏」⁽¹¹⁾云々。顯教ハ、イカサマニモ身語ヲ空テ一心ニ歸スル也(五オ)

これらを見ると、いづれも五日の講義内容は、四日の講義をふまえて、それを補足するものと言える。

「不樂外道二乘法」の句については、四日の講義では、上位のものが劣位のものを「外道」と呼ぶという一般的な意味を述べつつ、数論や勝論などのこととするのが妥当とする。五日の講義はそれを承け、「密教の立場からは、顯教を『外道』と呼ぶのではないか」との意見を取り上げて、「小乗を『外道』と呼ぶのは違って、顯密兩教とも人法二空を旨としているので、『外道』と呼ぶべきではない」としている。また、そのような論法を使うなら、金剛界大日から見

明恵の『菩提心論』理解（前川）

「常在人天受勝快樂」の句について、四日の講義では、「瑜伽の中で、菩薩になるだけで、大日如来の境地には到達しない」と考える者がいるのではないかとの問いを投げかけ、観智の上から言えば即身成仏であるが、出観すると凡夫なので、凡夫の立場から「人天」と言うと言明している。

「唯真言法中即身成仏」の句について、四日の講義では、「顕教や小乗であつても、成仏は即身成仏である」と説き、「どの位から成仏というのか。前生での結縁とは無関係に、即身成仏するのか」と問うている。これに対して、五日の講義では、「於諸教中闕而不書」の方を説明して、「密教では三密具足の成仏であるが、顕教では意密の成仏である」と論じている。

以上のように見てくると、四日と五日で重複している三箇所は、四日の講義を五日の講義で補足したものであり、そのことを示すため、わざわざ「五日」という日付を入れたと考えられる。

三 明恵の『菩提心論』理解の特色

『菩提心論』は、東密・台密を問わず、日本密教において重視されてきたが、その大きな理由の一つは「唯真言法中。即身成仏故。是故説三摩地。於諸教中。闕而不言」の句にあると言つてもよいであろう。

しかし、すでに見てきたように、明恵はこの句を文字どおりには理解しない。あくまでも自らの顕密一致の枠組みから解釈するのである。明恵の解釈では、この句は「三密具足の『即身成仏』を説いているのは密教だけである」と言っているに過ぎず、成仏そのものに関して顕密の間に優劣はないとするのである。

既に引用したように、明恵は、「即身成仏というのは、入観の間のこと、出観すれば凡夫のままである」と述べている。同じ趣旨が、以下でも言われている。

「從凡入仏位者亦超十地菩薩境界」者、『秘藏記』「所行々非所得果」云々。一座観智仏境ニ徹ル時、大日位ニ至ル。其後、出観、同凡夫。故、「所行々」ト云也。顕教中ニ四位ノ証アリ。信位ニ仏果ヲウルヲ「初発心時便成正覺」

ト云カ如ク、真言ノ即身成仏ハ信位ノ即身成仏ナルヘシ(六ウー七オ)

ここでは、さらに顕教の信・解・行・証の階位にあてはめて、密教の即身成仏は信位にあたると位置づけている。次の文からも同じような理解がうかがえる。

「三摩地菩提心」者、勝義ノ智恵、無自性観門ヲナシ、行願大悲、縁衆生。此ノ悲智ヲモテ心ヲ飭テ、三摩地ノ行ニ住スル也。必シモ非修恵。聞思相応。「撰論意言無分別観」等也(八ウ)¹²

ここでは、勝義・行願を経て行われる三摩地を、聞・思・修のうち、修恵とは言い切れず、聞思相応だとしている。この立場から、明恵は『菩提心論』で述べられる境地はあくまで因位の立場でとらえられた仏果であつて、仏果そのものではないとする。

「但具此心者能転法輪自他俱利」者、転法輪ハ必不限仏果。如上心ヲ具ル者、衆生ヲ化スヘケレハ転法輪□(ニ云?)也(七ウ)

「悉含普賢之心」者、人解行ノ三ノ普賢アリ。¹³「含普賢之心」云テ、「如来心ヲ含ス」ト不云事ハ、如来ノ位ハ等覺菩薩尚不能知。果分不可説也。因分可説ノ果分ヲ普賢ト云フ。行者所知ノ分齊ニ当カ故ニ普賢ノ心ト云フ。善財善知識ニモ見因広大相ノ知識ト云ハ普賢也。因広大ト云ハ果分ヲ取テ因位ニ置也。初、文殊ノ信智ヲ起テ、終ニ普賢ノ理ニ入。現身成仏ト云ハ是也(八オー八ウ)

金剛拳位、衆行円満、不立大日事ハ、五秘密軌ノ金剛サタヲ中臺トスルカ如シ。一万タラ(ニ曼荼羅)諸菩薩、皆金剛サタノ位ニ至ヲ、至極トス。此即、花嚴ノ普賢ヲ見因広大相ノ知識ト立テ、此所ニ至テ果位ヲ究竟スルカ如シ。此ハ因分可説ノ果分也。¹⁴果位ハ等覺菩薩尚不能知ノ位ナレハ、皆金剛拳ニ至ヲ至極トス。此ハ因位菩薩所知分齊ナリ。

「証無生智」者、分証無生智也(十一オー十一ウ)

「証無生智」を、「分に無生智を証するなり」と解するのは、『菩提心論』そのものからは、若干無理があるように思

われるが、明恵自身の理解としては一貫していることは、以上から明らかであろう。また、さりげなく「現身成仏」という言葉が使われているが、『解脱門義』の以下の文を参照するなら、これは密教の「即身成仏」と対比して、明恵が自らの成仏観を示すために使用したものと考えられる。

先問曰。何故立此（「仏光観の」図印乎。答。灑甘雨於火宅、得大車於露地、豈不歡喜耶。此文總括五位之法門、該羅十仏之境界。直至道場之宝乗、現身成佛之秘術也。是故図印文義置之座右。諷誦思惟為抑廢忘也（大正七二・七七 下二〇～二五）

問曰。如此修行人後生得何果報乎。答。依今生修行力故順次生即如善財童子大威光太子等。即十地窮満現身成仏益也（巻下。大正七二・八四下一～三）

第一の引用文を一見すると、「直至宝乗」と「現身成仏」とが対になっているので、「現身成仏」は「即身成仏」と同じように見えるが、第二の引用文を見ると、明恵が「現身成仏」で意味しているものは、「即身成仏」とは全く異なることが分かる。

明恵は或る談話で「我始三祇劫修行也。此ハ不語他人事也」（禪浄房筆『上人之事』、明資一・六〇〇・二二と語っている。「不語他人」と言っているとおり、著作の表面に現れることはないが、明恵の思想と実践を貫いているのは、「三祇劫修行」を是とする立場と言つてよいと思われる。『納涼房談義記』の「即身成仏」解釈は、このような明恵の立場を前提にした時、理解可能になると思われる。

四 結 び

改めて考えてみると、『納涼坊談義記』は、神護寺の伝法会での講義である。隆弁のように明恵と親しい僧たちが多かったとは思われるが、それなりの公式な場での発言であり、『菩提心論』という真言宗の中心論書を扱っていることを考えれば、明恵の発言は極めて大胆なものである。「唯真言教中即身成仏、顕教中不説之坎。凡顕教小乗等マテモ、

成仏スル定ハ、皆即身成仏也。即身成仏ハ、從何位論之乎。遇此教人、不論前生結縁、即身成仏スル歟」といった言葉は挑発的な響きさえ帯びているように思われる。

聴衆の反応がどうであつたかは分からないが、既に見たように九月五日の講義で前日の講義（しかも即身成仏にかかわる話題）の補足を行っていることを考えれば、少なからぬ抵抗を受けたのではないかと思われる。

その受容に関して、たとえば、頼瑜『菩提心論初心鈔』巻上に「不樂外道二乘法等者、此外道二乘異義不同也。雖然、打任（タル）義、普通外道二乗也。数論勝論等外道、声聞縁覚二乗也」（日藏（新）四八・九二下一―三）という文があるが、この中の「打任（タル）義」というのは、明恵の口吻と一致しており、『納涼坊談義記』（ないし、それに由来する口伝）を参照していた可能性はある。有快『菩提心論鈔』巻二には「上根上智事。一義云。上根者曰信進念定慧五根利也。上智者重挙五根中慧根也」（日藏（新）四八・二七一上―二七二下）とあるが、ここで述べられる解釈は、明恵のものと一致する。⁽¹⁵⁾このような部分的な一致はあるが、明恵の中心的な主張を正面切つて取り上げたものは、（さらなる精査が必要であるとは言え）今のところ検出できていない。

結局、明恵の立場は、「顕教側からの密教に対する接近」⁽¹⁶⁾ととらえられ、ほとんど無視されたのではないかと考えられる。

（略称）

真全 『真言宗全書』

明資 高山寺典籍文書綜合調査団編『明恵上人資料』第一―第五

※本発表は、平成二十三年度智山勧学会奨励研究助成（共同）「明恵上人夢記の集成・注釈と密教学的視点からの分析研究」（研究代表者・小宮俊海）の成果の一部である。

明恵の『菩提心論』理解（前川）

註

- (1) 前川健一『明恵の思想史的研究』(二〇一二年、京都・法藏館)に翻刻を収めている。以下、『納涼坊談義記』からの引用は、同書にもとづき、丁数を付する。
- (2) 奥田勲「明恵上人関係聞書類に見える人物について」(明資三)七四七～七五〇頁の「隆弁」の項に關係資料が網羅されている。
- (3) 高山寺古文書第三部(紙背文書)一二二・一二三に出る「聖範」は同名の別人。
- (4) 高橋秀城「頼瑜の夢想」(『智山学報』五七輯、二〇一〇年三月)九二頁に引用。
- (5) 湯浅吉美「『東寺長者補任』の翻刻(上)」(『成田山仏教研究所紀要』二一号、一九九八年三月)一四四頁。
- (6) 第一(真全三七・三上)・同上(二四上)・第二十四(四一一上)など。
- (7) 高橋前掲論文九三頁。
- (8) 『八十華嚴』卷五十一「如来出現品第三十七之二」「仏子。若無如来巧持智風。無量菩薩。皆墮声聞辟支仏地。由此智故。令諸菩薩。超二乘地。安住如来究竟之位。仏子。是為如来心第九相」(大正一〇・二七二中二九下三)。
- (9) 引用経文は『大日経』卷四「密印品第九」「爾時薄伽梵毘盧遮那。觀察諸大衆会。告執金剛秘密主言。秘密主有同如来莊嚴具。同法界趣幟幟。菩薩由是嚴身故。処生死中巡歴諸趣。於一切如来大会。以此大菩提幢。而幟幟之」(大正一八・二四上二九中四)の取意か。卷五「字輪品第十」「爾時薄伽梵毘盧遮那。告持金剛秘密主言。諦聴秘密主。有遍一切処法門。秘密主若菩薩住此字門。一切事業皆悉成就」(大正一八・三〇中八上・一〇)、卷三「悉地出現品第六」「善男子真言加持力故。法爾而生。無所過越。以三時不越故。甚深不思議縁生理故。是故善男子。当随順通達不思議法性。常不断絶真言道」(大正一八・一八中八上・一二)をも参照。
- (10) 「密印品」の中に「生生世世」の句はない。『大日経疏』卷十五「秘密漫荼羅品第十一之余」「悉地何時生者。経云世生生乃至業業不除。果令成熟彼時悉地成。一時業生令寄在身。得持誦者悉地從意生。此生生世世是義語也。梵云散跢那是識也。謂内心中也。猶如世間衆生造種種業。乘此業故而受果報。或一生百千万等生。此業不失熟即受報。今答此悉地生亦如是。如

行人随上中下期願。依真言法要而修得成悉地。由此悉地在身故。乃至世生生。常在行人身中猶如業果。雖復從衆緣生常自空寂。不有不無。而亦不敗不亡。從此悉地成後。世世受果無失敗也。乘悉地之業而受彼果。名為生悉地家。既生悉地家已。乃至成仏已來終不失壞。故云業不能除也」(大正三九・七三八下一〇～二三)

(11) 空海『御請来目錄』(定本弘法大師全集一・三九・一)。

(12) 最後の一文は、『華嚴經探玄記』卷九(十地品)の以下の部分の引用。「二如初地加行位既名信行地。即諸地之前俱加行位皆名信行。以撰論中意言無分別觀通四位。故知地上亦有也」(大正三五・二八一上二五～二八)。

(13) 明恵『解脱門義』卷上「又有人解行三普賢。文殊亦可准此。故說因分云普賢門。又云文殊門。此義可見至相孔目十玄門等也」(大正七二・八〇中一〇～一一)。智儼『孔目章』卷四(普賢品普賢章)「二一乘普賢亦有三人。謂第四十五知識普賢者是。二解。即普賢品六十行門。各皆普遍。及漸次深深深深深深深深。及等因陀羅微細事等。三行。即離世間品十種普賢心。十種普賢願行法。如文可知。余義如別章」(大正四五・五八〇中二七～下三)

(14) 以下の文を参照。明恵『華嚴仏光三昧觀秘寶藏』卷下「問。何故合此四心不成毘盧遮那。成金剛薩埵耶 答。深教秘密義。為顯果分不可說義。於果門立因名。依此義以毘盧遮那名金剛薩埵也。為顯因分可說義。於因門立果名。依此義以金剛薩埵名毘盧遮那也。除十信住行等五位。皆有此二分義。是故彼五秘密瑜伽。果分不可說之因分故。四聖合成金剛薩埵。三聖為體。因分可說之果分故。二聖合成毘盧遮那也。顯密多有此義。即善財知識中。顯因廣大相知識。普賢外不立別仏果」(大正七二・九七中二一～下二)

(15) 上根上智者、上根八信等五根、上智ハ此五根ノ中ノ恵心所也(二オ)。

(16) 小宮俊海『『真俗雜記問答鈔』における「梅尾義」について』(『智山學報』六十一輯、二〇一二年三月)一四五頁。

〈キーワード〉菩提心論、納涼房談義記、隆詮、即身成仏